

# 飾扇分教会

設立・昭和42年4月26日

祭典日・19日

兵庫県尼崎市



初代会長  
河村 きぬ



初代配偶者  
河村 弥三一



二代会長  
山本 實



二代夫人  
山本 和子

昭和四十二年四月二十六日  
初代会長 河村きぬ 任命  
昭和五十五年四月二十六日  
二代会長 山本實 任命

飾扇の初代会長河村きぬの祖母河村たけは、飾東の初代紺谷久平先生に肺結核の身上をたすけられて入信した。時に明治十七年。飾東初代が熱心に布教を開始された直後である。

たけは明治二十年一月十三日、当時飾磨真明講の講元であった紺谷久平先生が、赤衣と座布団を教祖に献納されるにあたり、紺谷たけ夫人をはじめ十人程の熱心な婦人達に加わって、一針づつ縫いあげのりに参加した、と記録されている。

河村たけの娘すては、牛尾家へ嫁したが、牛尾家は当時、釣針製造を家業としていたが思わしくなく、飾大分教会初代竹川萬次に教えられ、神戸へ出てあられ製造販売業を始めた。初めは大変な苦労があり、すての長女きぬは、十五才から約十年程は、床板に箆を敷いてその上で寝起きし、朝は三時頃から家業を手伝って精を出した。

きぬが二十三才の時、当時大阪市西区

鞆で海産物商を営んでいた河村弥三一と結婚したが、その頃大阪市港区で布教していた飾大分教会初代会長の仕込みを受け、次第に信仰の道に励むようになった。昭和二十年空襲を受けて家屋を焼失したので、神戸へ移転した。



教会の正面玄関

かくて、昭和三十年二月、河村きぬを所長として飾扇布教所を開設。

夫婦共々道に専心し、月次祭には大勢が参拝するようになった。

昭和三十五年頃から商売が思わしくなく、三十七年には商売をやめたが、夫弥三一はその年の暮れに出直した。



教祖九十年祭のバス団参

設立のお許しを頂き、河村きぬが初代会長に任命頂いた。

昭和五十四年十一月二十八日、河村きぬが七十八才で出直し、後任会長には当時尼崎市で布教中であった四十四歳の山本實が、昭和五十五年四月二十六日二

重なる節に親神様のおせき込みを悟り、昭和四十二年四月二十六日、神戸市兵庫区塚本通四丁目一番十号において飾扇分教会

代会長就任のお許しを頂き、同日現在地への移転も許された。昭和五十五年六月十五日、神殿移転建築並びに二代会长就任奉告祭を執行した。

山本は昭和二十六年十六才の時に母親が家出、自分自身も肺結核で倒れ、自暴自棄になり、強度の麻薬常習者となる。父芳男は、何とかして息子を更生させんものと、精神病院へ入院させるなど、医薬の限りを尽くすかたわら、あらゆる宗教の門を叩いたが徒勞に終わった。

實が毎日使う膨大な麻薬代のため、父芳男が丁稚奉公から叩き上げ、営々として築いた昆布商の土地家屋も人手に渡り、夜逃げ同様に移転した路地裏の小さな家も、すぐに借金の担保になり、その日のおかず代にも事欠き、寝るに寝具もないという赤貧洗うが如き目を覆うばかりの惨状に立ち至ってしまった。

収監された。

父の芳男は商売の関係であられ製造業の牛尾商店へ出入りしていたが、その都度息子の状態を話しては悲嘆にくれていた芳男を、見るに見かねた牛尾ひるゑに伴われて、当時の飾扇布教所の門をくぐったのが山本家の入信の元一日であり、昭和三十二年の夏のことである。



祭奉告移転教会

昭和三十五年二月二十六日、才の時、肺結核再発で入院中の病院を退院

したその足で、飾大三代会長竹川俊治と河村弥三に付き添われて、修養科志願のためおちばへ帰らせていただいたのが、山本實の入信の元一日である。

修養科修了後、詰所青年づとめに続き

飾大の青年づとめ中に、修養科で知り合った飾大所属の西村和子と結婚。



神殿内部

入信後も紆余曲折の道中であつたが、飾大会長の的を射る仕込みを受けた實はいんねん自覚の上から、教祖九十年祭を三年後に控えた昭和四十八年一月二十六日を期して、親子六人で現在地の尼崎で、単独布教を開始した。子供をかかえて、食事にも事欠く日々であつたが、布教専門に家族揃つてコツコツと布教を推し進めていった。

父芳男は、とても助からんと諦めていた息子が、たすけ一条に進み教会長を拝

命するに及ぶや、親神様の御守護の程を「この息子が教会長にならせていただきました」と、出会う人々にその喜びを語り伝えながら、昭和六十一年九月二十九日八十才で出直した。

山本實会長は、自身が重度の麻薬中毒の恐怖を身を以て知る上から、「中毒」に対する思いが強く、殊にアルコール依存症の人のおたすけに心を砕いた。苦しみ悩みを聞き、抜け出すにはこの道しかないと身を挺して脱却に導いた。

山本實会長自身が麻薬常習者であつたという因縁の上からか、布教開始直後から、アルコール依存症者、麻薬依存者及び刑務所出所者のおたすけに忙殺される。

昭和五十三年九月七日天理教断酒会を結成。個人のおたすけは勿論、飾扇分教会に於いて、月三回の断酒会例会、毎年一回おぢばでの記念大会に加え、毎月二十六日本部月次祭当日には南礼拝場前路上に於いて天理教断酒会路傍講演を行った。参拝者で賑わう路上での人々の奇異に見る眼に晒されながらのこの尊い行為は昭和五十六年十二月より昭和六十年十二月二十六日まで四年間に亘つて

とめられたが、何としても「中毒者」「依存症者」に助かつて貰いたいと、山本實が心身を傾注した証である。昭和六十一年七月二十五日天理教福祉課酒害相談室が設置され公認相談員九名に辞令が交付されるに及び、自主グループの天理教断酒会は昭和六十一年九月二十一日初志目的を達成したとして解散する。しかしながら、世に「中毒」の種が尽きるはない。

平成七年一月十七日午前五時四十六分神戸を中心に襲つた未曾有の阪神・淡路大震災により教会は半壊。主として神戸、西宮、尼崎に点在していたよふぼく信者宅も、全、半壊の甚大なる被害を蒙る。直ちに教会を挙げてよふぼく信者宅の復興ひのきしんに明け暮れ、それぞれある程度の落ち着きを見てから教会の工事に着手した。平成七年十月中旬、飾扇分教会は改修工事を完了した。山本實会長は度々の大きな身上や交通事故で、何度も出直しの危機に遭いながらその度に御守護をいただき、たすけの道に今も励んでいる。